

平成23年度 県小教研学習指導改善調査【結果分析】第4学年国語

1 調査結果の分析

(1) 資料選択について(①～⑦)

ア 資料を読み取る力・・・(①～④)

①の正答率は88.2%と高かった。インタビュー内容とメモの内容を照合して読み取ることができたと考えられる。②③の正答率は70%台と、やや低めである。メモの選択は正しくできているものの、【組み立て表】と【スピーチ原稿】の関連を理解せず、スピーチ原稿で書かれている順序と逆にしてしまったため誤答となったケースが目立った。④は、正答率60.3%で、読み取りの中では最も低い値を示した。誤答の傾向は二つあった。一つは、「お母さんが買い物好きなんだなあと思った」「お母さんの趣味だから」「ちらしを見ている何も買えない」など、メモの選択は正しくできているが、使わなかった理由が十分でなく誤答となったものである。もう一つの傾向は、メモの選択とその理由が、すべて間違っているものである。無答率も4.0%と読み取り問題の中では高く、「買い物で気をつけていること」というテーマを意識しながら【取材メモ】と【スピーチ原稿】を関連付けて読み取ることに弱さが見られた。

イ 資料を活用する力・・・(⑤⑥)

正答率は⑤54.5%⑥30.5%と、共に低い数値を示した。段落番号を正しく選択することはできても、「曜日が決まっておどろいた」「安心な物を選んでかぜをひかないように」など、自分勝手に文や語句を付け足してしまう傾向が見られた。また、無答率も8～10%と高いことから、【インタビュー】【取材メモ】【組み立て表】【スピーチ原稿】の四つの関連を理解し、それを活用する力が十分でないと考えられる。複数の資料や文章などを関連付け、多角的に読み取る活動を、国語の時間だけでなく他教科でも行っていく必要がある。

ウ 話題に沿って必要な事柄を選択する力・・・(⑦)

誤答の多くは、テーマを選んだにもかかわらず、組み立て表はA、Bどちらも取材メモの記号を選択し、かつ間違えているというものが多い。問題そのものを理解できていないと言える。また、メモの選択では、「なか」のメモ二つのうち、一つのメモが選択を間違っていたり、「おわり」のメモ選択を間違っていたりする傾向が見られた。

(2) 記述問題について(⑧～⑩)

ア 時間内に指定された文字数で文章を記述する力・・・(⑧)

正答率は85.8%と高い。昨年度の正答率も82.3%と高く、それを上回る結果となっ

た。⑦の資料選択ができていれば、指定された字数で記述することは、それほど難しくないと考えられる。メモと作文を関連させる指導を続けていくことが大切である。一方で字数の足りなかった児童、全く書けなかった児童への対応を引き続き検討する必要がある。

イ 段落を意識して記述する力・・・(⑨)

「はじめ」「なか」「おわり」の三部構成を意識して書くことができない児童が多い。「はじめ」の段落は意識できているが、「なか」「おわり」の段落を意識していない傾向が強い。また、「はじめ」の段落で発表する内容をきちんととらえた記述をしている児童は、その後の段落構成もしっかりとしていた。また、「まず・次に」「一つ目・二つ目」など、順序を表す言葉を使う児童は、段落を意識して書く傾向が見られた。

ウ 資料を活用して書く力・・・(⑩)

正答率は57.8%と低い。誤答では、選択した⑦の資料を十分に活用せず、内容が不足している、選択したメモ以外のものも使って書いている、メモに書かれていない内容を勝手に書いている、問題文を理解できず、南さんの取材メモをもとに書いている、などが見られた。まず、問題文をしっかりと読み、自分が選択したメモを使って書くのだという構えが必要である。また、イの段落を意識して記述する力と関連してくるが、自分が何をテーマに文章を書くのかという「はじめ」の段落意識をしっかりと持つことが大切である。ここで書く内容をはっきりさせておかないと、「なか」の段落で資料を活用した記述が十分でなくなる傾向があると考えられる。

2 今後、重点的に指導してほしい活動

(1) 国語の学習で

- 段落意識をもちながら、説明的文章を読んだり書いたりすること。
- メモを取ったり、目的に応じてメモを取捨選択したりすること。
- メモや資料をもとに、三部構成を意識して文章を書くこと。

(2) 他教科や総合的な学習の時間で

- 朝や帰りの会のスピーチなどを利用し、まとまりを意識して話すこと。
- 取材・見学・観察メモや収集した資料をもとに、文章を書き、発表すること。
- 日記や行事作文等、書く活動をこまめに取り入れること。

平成23年度 県小教研学習指導改善調査【結果分析】第5学年国語

1 調査結果の分析

(1) 資料選択について (①～⑤)

ア 資料を読み取る力・・・(①②)

①～⑤は、複数の資料(2種類の非連続型テキストと対話文)を対比させながら情報を正確に読み取る問題である。①については、正答率が91.6%と非常に高かった。対話文章の穴埋め問題である。正答は「ドッジボールとバスケットボール」または、どちらか一方でも可。正答となる言葉が短い名詞であること、片仮名であり長文の中で見つけやすいこと、穴埋めのすぐ下に「ボール運動」というヒントがあること、正答に幅があることなどが、正答率が高い要因と考える。

②については、正答率が46.6%と低かった。①に同じく、対話文章の穴埋め問題である。正答は「同じ学年の人だけで遊びたい」である。誤答で多かったのは「五・六年生と遊びたい」である。自分たちが5年生であるために、正答と誤答の内容を区別できなかったと考える。

イ 文章を読み取る力・・・(③～⑤)

③④については、正答率が75.7%・75.1%と非常に高かった。話合いの参加者の立場を読み取る問題である。西田さん・北川さん・東山さんの3名については、それぞれの会話の冒頭部に「A案が良いと思います。」「西田さんに賛成です。」「北川さんの意見に反対です。」と賛否がはっきりと書かれている。また南野さんについては、本人の言葉からは立場を読み取りにくかったとしても、すぐあとの司会者の言葉「南野さんの発言は、B案に賛成するものですね。」から、南野さんの立場を理解することができる。長文を読むことが苦手な児童でも、それぞれの立場を読み取ることは容易であったと考える。誤答として、人の名前ではなく、ABそれぞれの案のよさの記述が見られた。「だれですか」という問題の言葉を読み落としたと思われる。

⑤については、正答率が48.9%と低かった。誤答が44.3%、無答が6.8%である。正答は「異なる遊びや運動が同じ場所で行われる」という内容が書ければよい。誤答の例として「けがをやるから」「あぶないから」「ボールを使うから」などがあつた。遊びが混在することが危険であるという問題の所在をつかんではいないが、なぜ危険であるかという理由まで含めて説明することができない児童が多かった。①の問題文からの書き抜き問題の正答率の高さと比較したとき、児童の自由記述に対する不慣れや苦手意識が顕著に表れた結果だと考えられる。

(2) 記述問題について (⑥～⑩)

ア 制限時間内に指定された文字数で記述する力・・・(⑥)

⑥～⑩の記述問題は、読み取ったことに対する自分の考えを論理的に記述する問題である。記述問題は、指定された文字数に達しないと⑥が誤答、⑦以下がすべて無答とみなされる。技術面はともかく、まず指定された文字数以上で文章を書こうとする姿勢が大切である。

⑥については、正答率が84.7%である。昨年度4学年時の同項目が82.3%であった。年々長い文章を書くことに慣れてきている様子が見える。指定文字数を満たしていても、同じ言葉、同じ文を重複させて文字数を稼いでいるケースも見られた。記述量と共に、書かれる内容についても指導していきたいものである。

イ 段落を構成する力・・・(⑦)

⑦について正答率は 58.2%と低かった。⑥が誤答・無答であった場合、⑦以下はすべて無答とみなされる。そのため無答率が高い。⑦は指定された段落構成で意見文を記述する問題である。改行ができない、改行はできても一字下げができないなどの誤答が見られた。形式段落の意味や表記の仕方について、繰り返し指導していく必要がある。⑦の課題である「はじめ」「なか」「おわり」の三部構成は、作文の基本的な型である。この型に慣れていない児童が多い。三部構成を意識した場合、「はじめ」には自分の考えのみ、「なか」にはその根拠、「おわり」には考えの総括が書かれるべきである。誤答の例として、自分の立場が複数の段落に重複して書かれる、考えと根拠が一つの段落に混在して書かれる、「はじめ」と「おわり」に書かれた自分の考えにねじれがある、などである。

ウ 自分の立場を明確にして記述する力・・・(⑧)

⑧については、全体の正答率が 82.4%である。A案とB案からの二者択一であること、どちらを選んでも誤答ではないことなどから、第一段落に自分の立場を明記することは、容易であったと考えられる。まれに、「〇案に反対です。」「どちらにも賛成(反対)です。」という表現も見られた。曖昧な表現で明確な主張を避ける傾向は、普段の話し合い活動の中でも見られる。自信をもって自分の考えを主張することができるよう、話し合いや発表などの言語活動においても指導を工夫したい。

エ 理由を明確にして記述する力・・・(⑨)

⑨については、全体の正答率が 71.5%である。誤答の傾向として、理由を二つ書くことはできるが、重複した内容や、第一段落に書かれた立場と一致していない内容が見られた。物事を多角的に見つめ、情報を取り出したり、分類・整理したりする思考力と、それを論理的に記述する表現力が必要である。

オ 自分の体験・予想を加えて記述する力・・・(⑩)

⑩については、全体の正答率が 59.2%である。誤答・無答の傾向として、体験や予想を書いていないもの、また、体験や予想は書いていても、選択した立場との整合性が取れていないものが多かった。作文指導ばかりではなく日常の話し合い活動においても、体験や予想を取り入れることによって、自分の意見に説得力が増すということを実感できるよう指導を工夫するとよい。

2 今後、重点的に指導してほしい活動

(1) 国語の学習で

- 文章の要旨をとらえながら、説明的文章を読んだり書いたりすること。
- 資料を多角的に見つめ、情報を取り出したり、分類・整理したりすること。
- 主張文の基本的な構成や文末表現を模倣しながら、自分の考えを的確に記述すること。
- 普段から原稿表紙の表記のきまりを意識し、原稿用紙(またはマス目のあるノート)を用いて書くこと。

(2) 他教科や総合的な学習の時間で

- 図や表、写真などの非連続型テキストから、情報を取り出したり、分類・整理したりすること。
- 自分の考えを明確に表現したり、友達の考えと比較して、共通点や相違点に着目したりすること。

平成23年度 学習指導改善調査【結果分析】第6学年国語

1 調査結果の分析

(1) 資料分析について (①)

ア 資料を基に、必要な情報を条件に合わせて選択し、構成する力①

正答率71.7%であった。多くの子が資料Aと資料Bを見て、自由行動の条件に合うように、表を完成させることができた。

誤答としては、【自由行動の条件】を忘れていた場合が見られた。集合場所にもどることはできないことになっているのにもどってきていたり、体験・見学場所をとぼすことができないのにとぼしたりしている場合も見られた。また、賛成するコースと体験・見学先が一致しない場合も見られた。

無答の場合は、表の意味をあまり理解できていないと考えられる。非連続型テキストの読み取りにも慣れることが必要である。

(2) 記述問題について (②～⑤)

ア 時間内に指定された文字数で記述する力・・・(②)

正答率86.8%であった。指定文字数の360字未満の記述が10.9%、無答が2.3%となっている。今年度の学習課題のテーマは身近ではあるが、内容が架空のものであるため、状況を的確に把握することができない子もいたようである。どのような作文の課題に対しても、意見文の型に合わせて、記述できる力の育成が必要である。無答が減るようにさらなる努力が必要である。

イ 段落を構成する力・・・(③)

正答率53.3%であった。誤答としては、「初め」「中」「終わり」の三部構成ができていないものがあつた。例を挙げると、考えたコースとその理由がなく、いきなり体験・見学先の説明を書いているものがあつた。また、一段落目と二段落目が一緒になるものがあつた。

「初め」「中」「終わり」の三部構成を意識させ、見通しをもたせてから書かせることが大切である。また、一段落一事項を徹底することも大切である。段落の内容が定まることで、しっかりとした構成の文章とすることができる。

ウ 目的を明確にして記述する力・・・(④)

正答率78.6%であった。かなり多くの子が自分の選んだコースの理由を記述することができた。資料Bから必要な情報を読み取り、その中の情報を理由として記述をしていた。また、コースを奨める理由を書くことは、普段の学校生活でも慣れている活動であり書きやすさがあつたようだ。

誤答としては、書いている途中で選んだコースと違うコースの説明となっている場合も見られた。記述前のメモや見出しカードの指導を大切に、段落の見出しにそって記

述させることに慣れさせる必要がある。

エ 根拠を生かして記述する力・・・(⑤)

正答率 48.8%であった。ここでは選択理由として妥当性のある自分の知識・体験を記述し、より説得力のある意見文にする力が求められている。意見文のテーマが修学旅行ということで多くの子に馴染みがあるテーマであった。そのため、知識・体験がないという子は少ないと予想するが、実際には知識・体験を交えて記述することはできていない子が多くいた。その原因の一つとしては、自分の知識・体験を思い出すことができなかつたことが考えられる。自分の知識・体験を言葉にしたり、メモに書いたりすることを日常の指導に取り入れる必要がある。そして、作文指導において、知識・体験を入れると有効であることを繰り返し指導する必要がある。

2 今後、重点的に指導してほしい活動

(1) 国語の学習で

- 段落の構成を意識した作文指導を行うこと。

段落ごとに内容のまとまりを意識した文章を書かせることが大切である。そのためには、メモを活用し文章を書く方法を身に付けさせたい。メモを使うことで段落ごとの内容が的確となり、構成が整った作文とすることができる。

- 目的を明確にして記述する力を高める指導を行うこと。

作文を書いている途中で目的が不明確になることがある。目的意識をしっかりと持たせることが必要である。その手立てとして、メモと構成表を活用した構成の指導が有効である。構成段階で論旨にあった「構成になっているか。」「内容になっているか。」を事前に指導をすることが大切である。

- 根拠を生かして記述する力を高める指導を行うこと。

知識・体験を根拠に取り入れることで、説得力の増す文章になる。子どもたちは自分の知識・体験を自分との対話を通して、掘り起こすことが必要である。テレビや友だちの話なども知識として書いてよいであろう。作文を書く際、自分の体験やテレビや友だちの話などを知識として思い起こし、その知識や体験を根拠として書くようにしたい。

(2) 他の教科や総合的な学習の時間で

- 資料を読み取り判断する力を高める指導を行うこと。

社会科や総合的な学習の時間において、様々な形の非連続型テキストを読むことになる。ただ単に、数値を読むことに限らず、数値を読み取ったら、そこからどのようなことが分かるかの判断をし、自分の意見をもつことが大切になる。日頃の学習で行っていききたいものである。